

アグリカルチャー・トレーディング 木村慎一

ともに実感しよう、ウクライナの大地で メイド・バイ・ジャパニーズの可能性を

今春放送されたNHKスペシャル『ランドラッシュ』に登場し、

本誌読者以外にも広くその存在が知られるようになった

青森県つがる市の農業経営者・木村慎一氏。間もなく還暦を迎えるが、

農業に対する情熱はますます燃え上がり、一時は世界資本による

農地収奪で危ぶまれたウクライナでのメイド・バイ・ジャパニーズは、

着実に実を結ぼうとしている。当社主催のウクライナツアーのガイド役を

務める木村氏に、ウクライナの魅力と今回のツアーの見所を聞いた。

**チエルノーゼムの大地で
農業をしたかっただけだった**

昆吉則（本誌編集長） 当社では来

る8月に「木村慎一と行くウクライ

ナツアー」を実施いたします。農業

経営者の仲間はもちろん、農業周辺

で事業をなさっている方、投資家の

方々と一緒にウクライナを訪れ、ガ

イド役を木村さんが務めやってま

す。それで今回は、宣伝も兼ねまし

まった。いわゆるチエルノーゼムで、

とにかく感動して、ぜひこの場所で

私の農業をやりたいと思ったんで

す。私ももう60歳になりますから、

今までのこのノウハウをすべて注ぎ

込んで、理想の農業をやりたいくなっ

たんです。

昆 最初にウクライナに行ったのが

いつですか？

木村 2007年ですね。30坪ぐら

いのダーチャ（編集部註・ロシア語

で家庭菜園）を借りて、大豆播きま

したけども、まあさすがチエルノー

ゼム。無肥料だったけれども、私の

背丈よりも伸びてしまいました。

「ジャックと豆の木」みたいに蔓化

して、天気さえ良ければなんぼでも

伸びましたし、実が全然一粒も成り

ませんでしたね。そんなものだから、

まざまざと土壌の良さを知り、怖さ

も知ったという感じでしたね。

昆 穀物価格が上昇したこともあつ

て、約束していた農地が借りられな

くなってしまった。

木村 「300ha、お前にやるから

好きなようにやれよ」なんて言われ

たけど、春になったら、「3haしか

貸せないよ」と。私は、ただこの場

所で農業やりたいだけだったんです

けど、穀物高騰の背景があつて、ウ

クライナに世界中の企業が群がって

土地の収奪をしていたわけです。

昆 その話を聞いたある商社マンが

「きちっとした契約もしないでやる

のはバカじゃないのか？」「あんな

カントリーリスクのある国でやるの

いうのは考えられない」と言った。

私は「バカ野郎、ふざけんじゃねえ

と思ったわけですよ。だけど、木村

さんはいつものペースで「ウクライ

ナだろうが青森だろうが、土地借りるって、そんな簡単なものじゃないよ。国とか、何とかじゃなくて、それは農民だったら当たり前にかつていることで、そういう中で人間関係作っていくんだよ」って、ガハハって笑いとばしたんですね。その商社マンに「お前、こんな日本の宝みたいなやつがいるってことに気付かないのか！ お前は勉強できるかもしれないけれど、こいつ津軽弁しか話せないのに、未来を作ってる……こういうバカが、日本や日本の農業を変えていくんだ！」っていう話をしたのを覚えています。

木村 まあ、カラオケの十八番が『マイウェイ』の私は、信じたこの道を行くだけなんですけどね、アッハッハッハ（笑）。

ウクライナでコメを作って 日本農業を活性化できる

昆 今になって穀物高騰も冷めて、世界の資本がウクライナから逃げ出しつつある。そして現地で人間関係も築いた木村さんがいる。それゆえに、ウクライナにチャンスはあるはずです。

では、具体的に何を見てくるかというと、大豆はもちろんですが、それ以上にコメの可能性を探っていく

たいと思っています。ロシア、EUのマーケットを含めて非常に面白い場所ですから。

木村 今、私のところに降って湧いたように田んぼを買わないかという話が出てきているんです。地元の友人は水田をやっていますし、「日本ではコメ余りなのに……」なんて袋叩きに遭うんじゃないかっていう気持ちがないわけではないけれど、冷静に考えてみると悪い話ではないんですね。

ウクライナでは10a、10〜12俵とれているんです。もちろん、乾田直播でやった場合です。でも、仮に水田で8俵しかとらない、1俵3000円で試算しても、ものすごい利益が出せる。これは事業としていいんじゃないのかなと思います。ただ、日本人に対してどういう評価を受けるのかなという心配もあるので……。

昆 大義名分も当然、考えている。

木村 そう。で、よくウクライナの生活を見ると、ウクライナ人もコメを食べます。でも足りないから、スペインとかイタリヤ、遠くはカリフォルニアからコメを買っているんです。スーパーの売り場にはたくさんコメが並んでいます。となると、ジャポニカ米もやってみたら面白いんじゃないかなって思うわけです。それだけじゃなく、日本の余っている



木村 慎一

■プロフィール（きむら・しんいち）

1950年青森県生まれ。青森県立五所川原農林高校卒業。76年、4Hクラブの仲間だった竹内雅孝氏、佐々木君夫氏とともに農事組合法人黄金崎農場を設立、理事に就任。黄金崎農場の経営を離れた後はつがる市および上北地域において約150haの農業経営を行なう。2007年よりウクライナに進出、Made by Japaneseに取り組む。現地での主要品目は大豆、トウモロコシ、小麦、大麦。



コメ、これを富裕層に売るといいう商売があるのではないかと。現地で日本人が作ったコメはたしかにおいしいけれど、日本の田んぼで作られた本物も食べてみたいと、そういう願望が私は必ず出てくるだろうし、またそういう仕掛けもしなければならぬでしょう。その暁には、日本のコメが100万t、200万tなんて、簡単に私は売れる市場がヨーロッパに作れるんじゃないでしょうか。その呼び水として、私の仕事もあるんじゃないかと思うんです。

その中で日本のコメが余っているにすぎない。だけど、世界のマーケットは、和食・寿司市場が確立されている。経営者は中国人や韓国人、ベトナム人で、使っているのはカリフォルニア米、スペイン、あるいはエジプトのコメです。そういう中で、和食といえども和食でないというような食文化が広がっているわけです。日本人は何もしてこなかったのに、我われの食のマーケットを広げてもらったわけです。そう考えれば、日本の農業経営者が日本品種をカリフォルニア米よりも安く、高品質で、大量に、生産拠点を世界各地に作ってあげば、非常に可能性がある。その結果、最高級品として日本産米も海外にマーケットを開くためにも、メイド・バイ・ジャパニーズのコメにはチャンスが生まれてきますよ。競争の激しい大豆や小麦をウクライナで作るよりも、ずっと。

木村 そうですね。語弊があるかもしれないかもしれませんが、世界の多くの主食がパン。その原料の小麦は、極端に言えば、どこでもできる。でも、コメは限られた場所しかできないし、水がないとできない。日本人がずっと食べてきたコメは、世界中で一番素晴らしい穀物ではないですか。コメを世界中に広めても、バチは当たらないし、閉塞感がある日本

**現地の農業経営者を交えて
農業版ヤルタ会談を開こう**

のコメ農家に、新しいビジネスチャンスができるように思います。その開拓者として、私にも役目があるのではないかなと思っています。

昆 ウクライナの人も日本品種のコメも喜ぶでしょう？

木村 日本から炊飯器持って行っておにぎり作って食べさせると、100人中100人が「これは美味しい！」と言ってくれますよ。

昆 日本、日本人、日本製品に対するウクライナの人々の期待はどうですか？

木村 車、テレビ、カメラ、ありとあらゆるもの、日本のものが一番良いという神話みたいな、そんなムードがありますね。お世話になっている通訳さんも、日本に帰ったら、きっといいものだから長靴を買ってきてほしいと頼みます。「いや、日本で日本製の長靴探すなんて難しいよ」って言ったんだけど（笑）、そのくらい日本に対しては信仰というか、尊敬している。そういう環境は、日本の工業界が作ったものですけど、私たち農家がご相伴に預かっていいだろうし、そのためにはきちんとした責任を果たしたいですね。

昆 多くの人にこのツアーに参加してもらいたいですので、最後はガイド役の木村さんに、ツアーの見所をお聞きしましょう。

木村 麦は終わってはいませんが、大豆とコメがそろそろという頃ですね。あと世界で一番ヒマワリが多い国で、まだ咲いている時期です。

昆 ソフィア・ローレンとマルチェロ・マストロヤンニが主演した映画『ひまわり』の舞台ですね。

木村 ワイナリー視察も予定していますが、世界的には有名ではないものの、ワインやブランドーは素晴らしいし、原料のブドウもたくさん良いものがとれているので、農産加工を見るのも、面白いと思います。また、あのヤルタ会談を行なったヤルタにも行きますが、日本の戦後体制が決められた場所で、ウクライナの人を交えて、小さな国際会議もできませんけど「日本人とは何か」「平和とは何か」を一緒に考え共有できればいいんじゃないですか。

昆 ビジネスチャンス以上に農業を通じて我われ日本人が世界にどうお役に立てるか、と考えられる機会になったらと思います。みなさん、ぜひご参加ください。（なお、今回のインタビューの一部は動画配信する予定です。ホームページやメルマガ等で告知いたします）